

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

## ▶ 日本語の変化・状態を表す動詞一日中対照研究

doi:10.29714/TKJJ.200305.0006

淡江日本論叢, (12), 2003

作者/Author：鍾慈馨

頁數/Page：97-109

出版日期/Publication Date：2003/05

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200305.0006>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



# 日本語の変化・状態を表す動詞 —日中対照研究—

淡江大学専任講師

鍾慈馨

## 論文要旨

本論は次の二つの観点から日本語の自動詞の状態性を見る。

1. 自動詞に変化する或いは状態を表す機能を有するかは、その自動詞文の主語の名詞が変化する性質を持っているか否かによって決まる。
2. 感覚・感情を表す自動詞文において、一度だけの感覚・感情を表現する場合は、感覚・感情の変化が起こる時間の違い、そして、繰り返す感覚・感情を表現する場合は、その感覚・感情の変化が継続するか否かによって、自動詞の変化する性質が状態性に変えることがある。

## キーワード：

自動詞、状態性、変化動詞、状態動詞

## 一. 日本語の変化・状態を表す動詞

日本語では、動詞は物事の動作・作用などの変化或いは状態を表すことができる。例えば、

(1) パンを食べる。

(2) 本を読む。

(3) 花が咲く。

(4) 犬が吠える。

(5) 金が足りる。

(6) 字が違う。

上に並べた例文(1)～(2)の他動詞の例文から分かるように他動詞は動作・作用の変化しか表現しないのに対して、例文(3)～(6)の自動詞の例文から、自動詞は動作・作用の変化のみならず、物事の状態をも表現することができることは明白である。

そして、日本語の自動詞は、同じ動詞でも時として、動作・作用の変化と状態両方を表すことができる。

例えば、

(7) 河水にどろが混じる。

(8) 「その三軒分の本棚ってできたの?」「あれがそうです」太郎は、部屋の壁面を示した。「あら、ほんとだ。あんまり大きいもんで目に入らなかったわ。あれがいっぱいになるまで本を買って読む気なの?」「別に、頑張ってるわけじゃないんですよ。ただ本で、下らないのも混じるでしょう。僕の場合、漫画本とか、ちょっとした雑誌の類とか、参考資料とか……」(太郎物語 P1215)

(9) ご飯が冷える。

(10) 今日も冷える。

上の(7)と(9)の文は動作・作用の変化を表す文。(8)と(10)の文は状態を表す文。

ここでは、上の(7)と(8)の文の「混じる」、(9)と(10)の文の「冷える」のような動作・作用の変化と物事の状態の両方とも表現できる自動詞を取り上げ、どのような文脈条件において自動詞が動作・作用の変化を表すか、或いは状態を表す

かについて考察する。そして、同じような事柄を中国語にすると、どう対応するのか、その相違点を明らかにする。

自動詞は動作・作用の変化と状態を表すことができることは前に並べた(3)～(6)の例から明らかである。しかし、(7)～(10)の自動詞文から分かるように、組み合わせの名詞項の性質によって、(7)と(9)の文のような動作・作用の変化しか表さないものと、そして、(8)と(10)の文のような変化を表す機能がなくなり、単なる状態を描写するようなものがある。

### (一) 主語の名詞の性質によって動詞が変化か、状態を表す

変化動詞は物事の動作・作用などの変化を表す。

例えば、

(3) 花が咲く。

(4) 犬が吠える。

上の例文で、動作・作用の変化が成立できるのは、主語の名詞つまり動作・作用の主体が変化する性質をもっているからである。仮に、その主語が文の中で変化する性質を持たない場合、変化を表す動詞文は成り立たない。

例えば、(11a) 河水にどろが混じる。

(11b) …ただ本で、下らないのも混じるでしょう。… (太郎物語 P 1  
215)

(12a) 鐘の音が山の向こうまで響く。

(12b) トンネルの中で音ががんがんと響く。

(13a) ご飯が冷える。

(13b) 今日も冷える。

(14a) 傷は痛むから、そのときは湿布をしなさい。

(14b) 今、頭がずきずきと痛む。

(15a) 人が走る。

(15b) 道が東西に走る。

上の(～a)の文の主語の名詞はいずれも動作・作用に相応して変化する性質をもっているものであるのに対して、(～b)の文の主語の名詞は文の中でそのような変化する性質をもたない。したがって、(～a)の文とは同じ動詞にもかかわらず、

(～b)の文の動詞は状態動詞としか認められない。次に、変化動詞と共にしか現れない副詞の「すぐに」を文中に入れてみると明らかである。

(11a') 河水にどろがすぐに混じる。

※ (11b') …ただ本て、下らないのもすぐに混じるでしょう。…

(12a') 鐘の音がすぐに山の向こうまで響く。

※ (12b') トンネルの中で音がすぐにがんがん響く。

(13a') ご飯がすぐに冷える。

※ (13b') 今日もすぐに冷える。

(14a') すぐに傷は痛むから、そのときは湿布をしなさい。

※ (14b') 今、頭がすぐにずきずきと痛む。

(15a') 人がすぐに走る。

※ (15b') 道が東西にすぐに走る。

(～a)の文は変化の意味をもつ動詞文で、副詞の「すぐに」が入ると、変化が速やかに行われるという意味の自然な文になるのに対して、(～b)の文はいずれも変化を伴わない状態の文であるため、副詞の「すぐに」が入ると、非文になる。したがって、(～b)の文の動詞を「～ている」の形で変えても、基本型の「～る」形と状態の意味は変わらないのに対して、(～a)の文の動詞を「～ている」の形で変えると、意味は変ってくる。

(11a'') 河水にどろが混じる ≠ 河水にどろが混じっている。

(11b'') …ただ本て、下らないのもすぐに混じるでしょう。… =  
…ただ本て、下らないのも混じっているでしょう。…

(12a'') 鐘の音が山の向こうまで響く。 ≠ 鐘の音が山の向こうまで  
響いている。

(12b'') トンネルの中で音ががんがん響く。 = トンネルの中で音が  
がんがん響い ている。

(13a'') ご飯が冷える。 ≠ ご飯が冷えている。

(13b'') 今日冷える。 = 今日冷えている。

(14a'') 傷は痛むから、そのときは湿布をしなさい。 ≠ 傷は痛んで  
いるから、そのときは湿布をしなさい。

(14b'') 今、頭がずきずきと痛む。 = 今、頭がずきずきと痛んでいる。

(15a'') 人が走る。≠人が走っている。

(15b'') 道が東西に走る。＝道が東西に走っている。

上の(～a)の文は変化を表す動詞文、(～b)の文は変化を伴わない状態を表す動詞文であるが、その動詞を「～ている」の形に変えると、(～a'')の文は動作の持続或いは変化の結果の状態を表す文になる。一方、(～b'')の文は基本型「～る」形と同じく、現在の状態を表す。

日本語の動詞文において、組み合わせの主語の名詞が文の中で変化する性質をもつか、もたないかによって、同じ動詞でも変化動詞か、状態動詞か、わきまえて表現していることは以上の調べで明らかになる。

## (二) 中国語の対応する表現

日本語の変化・状態を表す動詞が使われる(～b)の文のような基本型「～る」形が表す状態表現を、中国語で、同じような事柄を表す場合、中国語では、変化か、状態かによって、違った形で表される。

(11a) 河水にどろが混じる。混じる→【滲入】

(11b) ただ本で、下らないのもすぐに混じるでしょう。混じる→【包含】

(12a) 鐘の音が山の向こうまで響く。響く→【傳(到)】

(12b) トンネルの中で機関車の音ががんがん響く。響く→【很響；  
(隆隆)作響】

(13a) ご飯が冷える。冷える→【變冷】

(13b) 今日も冷える。冷える→【很冷】

(14a) 傷が痛むから、そのときは湿布をしなさい。痛む→【會痛】

(14b) 今、頭がずきずきと痛む。痛む→【很痛】

(15a) 人が走る。走る→【跑】

(15b) 道が東西に走る。走る→【橫跨】

## 二. 感覚・感情を表す自動詞

(一) 一度だけか、或いは繰り返す出来事

われわれは物事の変化を動詞の現在形で表すことができる。しかし、感情や感覚の発生や変化を表す時、感情や感覚動詞は人間の内在的精神行為で、しかも、その発生や変化はなかなか表から物理的に測定しにくいものがあるため、動詞の現在形で表すと、それが感情・感覚の変化なのか、状態なのか、区別できないことがある。したがって、物事の変化を表しても、感覚・感情動詞には他の動作動詞と違った意味が見られる。動作動詞の現在形は、一度だけの出来事か、繰り返す動作の変化を表すことができる。例えば、

(一度だけの出来事)

(16) 明日の運動会のリレーで、田中さんは二番目を走る。

(繰り返す動作)

(17) 毎朝生徒たちは学校から海岸まで五千メートルを走る。

感覚・感情を表す動詞の現在形も、動作動詞と同様、一度だけの、或いは繰り返す感覚・感情の変化を表すことができる。例えば、

(一度だけの感覚・感情表現)

(18) 女房たちもそろってきれいに着飾り、化粧して並んでいる。源氏はそれを見ると、かの左大臣邸の人々の、悲しみに沈んでいた様子が思い出され、胸が痛む。(新源氏物語 P4 1 7)

(繰り返す感覚・感情表現)

(19) 「派手な病気でしょう。とにかく、こいつは痛いんですよ。三叉神経に来れば目の玉が痛いし、肋間神経にすれば息する度にアバラ骨が痛むんですよ。ついに、一晩だけ麻薬うったものな、藤原君も」(太郎物語 P1 1 4 4)

動作動詞でも、感覚・感情動詞でも、一度だけのと繰り返す変化が表現できることは上の例で分る。しかし、動作動詞と感覚・感情動詞、両方の動詞そのものの性質が違うため、動作動詞が表す動作は、一度だけの場合でも、繰り返す場合でも、その動作の発生・持続・終了の過程が明白なのに対して、感覚・感情動詞は一度だけの感覚・感情経験でも、繰り返す場合でも、それが感覚・感情を感じる時点の違いによって、或いは継続するものか、否かによって、状態表現になることもある。たとえば、

(一度だけの感覚・感情表現)

(A) 当時の感覚・感情

(20)「お金を百万円ほど貸してください。」「ああ、それは困ります。」

(21)(スープを飲んでから)「このスープは暖まりますね。」

(22)落選の知らせを聞いてがっかりする。(日本語基本動詞用法辞典)

(23)きのうひとりで家じゅうをそうじしたのできょうはとてもかたがこる。

(外国人のための基本語用例辞典)

(24)「東京は空襲で大変なようだが、松本はまあ大丈夫ずら」

「でもあのB29の性能って大したものじゃないですか。主人は怒るんですよ。警報も出ないのにしんき臭くっていけないって。でも、いずれはどんどんやってくるに決っているわ。歳のせいで、あたし心配性になったのかしら」(楡家の人々P1697)

(25)それに、子供雑誌にも日米未来戦なんて話ばかりでるんで、軍艦の玩具を買ってくれくれって困るわ」(楡家の人々P534)

(B) 未来の感覚・感情の変化

(26)徹吉は持参した水蜜桃を二つ、流れに沈め、それが冷えるのをじっと待った。(楡家の人々P1192)

(27)そして強者はこのような迫害の時代にも信仰のために炎に焼かれ、海に沈められることに耐えるだろう。(沈黙P211)

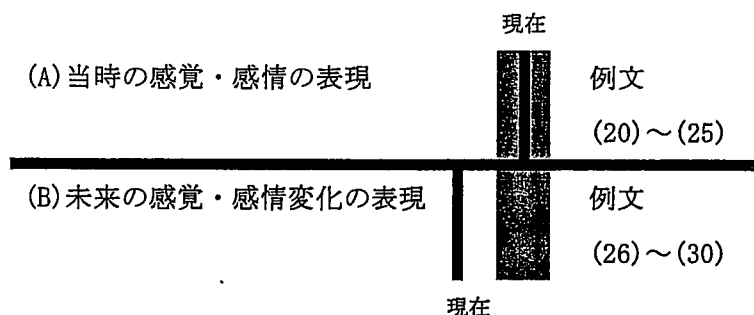
(28)「素人ならとにかく芸者が、遠い山のなかで、殊勝な稽古をするんだから、音譜屋さんも喜ぶだろう。」(雪国P106)

(29)本を他人に見せるにも、かくの如き順序があるのだ。それを受け取るにも、当然、受け取り方の作法というものが存在する。これでは肩がこるので飛び越して楽器の項を見る。(風に吹かれてP416)

(30)気違い茄子の花を食べた猫は、必ず気が狂うのであろうが、青洲がそれをどうしようとしているのか、加恵には見当がつかない。(華岡青洲の妻P187)



一度だけの感覚・感情表現例文(20)～(25)を見てみると、感覚・感情動詞の現在形で一度だけの感覚・感情経験を表す動詞文であるにもかかわらず、みんな話す時点その当時の心理・生理の状態も意味している。それに対して、(26)～(30)の例はみんな感覚・感情の発生や変化を表す文である。図にすると、下のようになる。



(網かけの部分感覚・感情の変化にあたる)

(A)類のような文は話者が話す時点その当時の感覚・感情の文であるのに対して、(B)類のような文は話者がこれから経験する感覚・感情の変化の文である。次に、繰り返す感覚・感情表現を見てみよう。

(繰り返す感覚・感情表現)

(C) 継続する感覚・感情の表現

(31) 輝く太陽と乾燥した空気のためかしきりと喉が乾く。(若き数学者のアメリカ P 1 9 2)

(32) 「…肋間神経にすれば息する度にアバラ骨が痛むんですよ。ついに、一晩だけ麻薬うったものな、藤原君も」(太郎物語 P 1 1 4 4)

(33) もう、朝の内から大分暑くなって来ていた。OLたちにとっては、難しい季節だ。通勤電車は混んで暑いが、社内はクーラーが利いて、腰や足が冷える。(女社長に乾杯 p 6 6 0)

(D) 継続しない感覚・感情の表現

(34) 七面鳥はもういなかったが家鴨が二羽だけ交っていて、なにかの拍子に、この家鴨たちと鶏たちの間にかかなりの騒擾が起ることがある。しかしそれはすぐ静まる。(楡家の人々 P 1 3 5 4)

(35) 八月に入った。医院の前は打水をしてもすぐ乾く。(花埋み P 6 8 3)

例文(31)～(35)は繰り返す数回にわたる感覚・感情の発生や変化を表す動詞文である。その中に例えば、例文(31)～(33)の文を見てみると、そのような文はある限られた時間帯の中の継続する表現とも見られる。例えば、「この一週間風邪で頭が痛む。」という文があるが、最近この期間中に常に発生する頭痛の生理現象の意味であるが、最近この期間中、継続する頭痛の生理状態と解釈してもよいと考えられる。例文の(31)～(33)の動詞文に「このごろ、とても～。」の時間と程度を表す副詞を動詞の前につけると、次のような文になる。

(31') このごろとても喉が乾く。

(32') このごろとても骨が痛む。

(33') このごろとても腰や足が冷える。

※ (34') このごろとても騒擾が静まる。

※ (35') このごろとても医院の前は乾く。

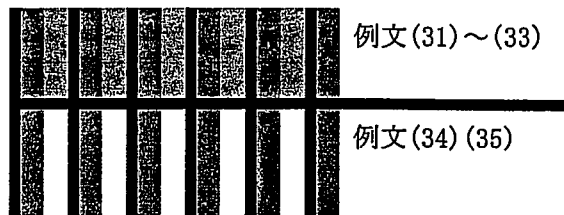
(31')～(35')の文はこの期間中、継続する状態の表現と見てもよい。しかし、(31')～(33')の文に対して、(34')～(35')の動詞文に程度を表す副詞を入れると、この期間中、継続する状態と解釈することができない。

したがって、図にすると、下のようになる。

(繰り返す感覚・感情表現)

(C)継続する感覚・感情の表現

(D)継続しない感覚・感情の表現



(濃い網かけの部分は繰り返し変化する感覚・感情にあたる)

(図の上半部、網かけの部分全体は継続する感覚・感情にあたる)

(C)類の表現においては、繰り返し変化する表現であるにもかかわらず、全体としては一つの継続する感覚・感情の表現にもなる。それに対して、(D)類の表現では動詞の性質には、発生・持続・終了、それぞれの変化の過程が明らかであるため、継続する感覚・感情の表現とは見られない。

## (二) 中国語の対応する表現

日本語感覚・感情動詞における一度だけの及び繰り返す感覚・感情の表現を見てきたが、一度だけの感覚・感情表現には(A)の当時の感覚・感情の表現(B)の未来の感覚・感情変化の表現に分けることができる。そして、繰り返す表現には(C)の継続する感覚・感情の表現と(D)の継続しない変化する感覚・感情表現がある。

同じような表現を中国語にすると、一度だけの感覚・感情表現では(A)の当時の感覚・感情の表現は中国語では状態表現で表される。そして、繰り返す感覚・感情表現では(C)継続する感覚・感情の表現は、中国語では繰り返して変化する表現及び状態表現で表される。次を見てみよう、

(一度だけの感覚・感情表現)

(A) 当時の感覚・感情

(20" ) 「お金を百万円ほど貸してください。」「ああ、それは困ります。」

困る→【有困難】

(21" ) (スープを飲んでから)「このスープは暖まりますね。」

暖まる→【很温暖】

(22" ) 落選の知らせを聞いてがっかりする。

がっかりする→【好失望】

(23" ) きのうちひとりで家じゅうをそうじしたのできょうはとてもかたがこる。

こる→【酸痛】

(24" ) 「…主人は怒るんですよ。…」

怒る→【很生气】

(25" ) 「…軍艦の玩具を買ってくれくれって困るわ」

困る→【很困擾】

(B) 未来の感覚・感情の変化

(26" ) …水蜜桃を二つ、流れに沈め、それが冷えるのをじっと待った。

冷える→【變涼】

(27" ) …炎に焼かれ、海に沈められることに耐えるだろう。

耐える→【會忍耐】

(28" ) 「…音譜屋さんも喜ぶだろう。」

喜ぶ→【會高興】

(29" ) …これでは肩がこるので飛び越して楽器の項を見る。

こる→【會酸痛】

(30" ) 気違い茄子の花を食べた猫は、必ず気が狂うのであろうが、…。

狂う→【會發狂】

(繰り返す感覚・感情表現)

(C) 継続する感覚・感情の表現

(31" ) 輝く太陽と乾燥した空気のためかしきりと喉が乾く。

乾く→【會乾】【很乾】

(32" ) 「…肋間神経にすれば息する度にアバラ骨が痛むんですよ。

…」

痛む→【會痛】【很痛】

(33" ) …通勤電車は混んで暑いが、社内はクーラーが利いて、腰や足が冷える。

冷える→【會冷】【很冷】

(D) 継続しない感覚・感情表現

(34" ) …この家鴨たちと鶏たちの間にかなりの騒擾が起ることがある。しかしそれはすぐ静まる。

静まる→【安靜下來】【※很安靜】

(35" ) 八月に入った。医院の前は打水をしてもすぐ乾く。

乾く→【變乾】【乾】【※很乾】

日本語の変化を表す感覚・感情動詞とそれに対応する中国語の表現を並べて比べてみると次のような表ができる。

		日本語 動詞	中国語の 対応する表現
一度だけの感覚・感情表現	(A) 当時の感覚・感情	変化	状態
	(B) 未来の感覚・感情変化	変化	変化
繰り返す感覚・	(C) 継続する感覚・感情表現	変化	状態／変化

感情表現	(D)継続しない感覚・感情表現	変化	変化
------	-----------------	----	----

上の表から、次のことが分る。一度だけの感覚・感情の変化表現には、当時と未来の変化を表すものがあるが、当時の感覚・感情を表すものは中国語では、いずれも状態表現で表される。また、繰り返す感覚・感情の変化の表現には、継続する変化と継続しない変化とがあるが、継続する変化の文は中国語では、いずれも状態表現でも表すことができる。

### 三. 結論

この論文では一. 日本語の変化・状態を表す自動詞と二. 日本語の感覚・感情を表す自動詞を見てきたが、次のようにまとめてみる。

1. 動詞文において、変化を表す動詞でも、その文の中で主語の名詞が変化する性質を持っていなければ、変化を表す文ではなく、状態文として成立する。  
同じような表現で、中国語は主語の名詞に変化する性質を持つか、持たないかによって、変化か状態かの表現に使い分ける。
2. 動作性が目立たないような感覚・感情動詞でも当時の感覚・感情を表す表現や繰り返して継続する変化の表現はいずれも中国語では状態表現で表される。  
日本語の変化を表す動詞は状態表現においても、使われていることは以上の調べで分る。

## 参考文献

- 金田一春彦 編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房  
池上嘉彦 著 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店  
国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』 秀英出版  
国立国語研究所 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版  
砂川有里子 著 (1986) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 2 する・した・している』 くろしお出版  
文化庁 (1971) 『外国人のための基本語用例辞典(第三版)』 大蔵省印刷局  
小泉保 等 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館  
岩岡登代子・岡本きはみ (1993) 『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 3 動詞』 荒竹出版

## <用例の出典>

『日本語基本動詞用法辞典』

『外国人のための基本語用例辞典』

『新潮文庫の100冊』から

『新源氏物語』 田辺聖子

『華岡清洲の妻』 有吉佐和子

『雪国』 川端康成

『女社長に乾杯!』 赤川次郎

『楡家の人々』 北杜夫

『風に吹かれて』 五木寛之

『太郎物語』 曾野綾子

『沈黙』 遠藤周作

『若き数学者のアメリカ』 藤原正彦